

# 石水期・清沢満之における

## 「現生正定聚論」の究明(下)

——清沢満之における「現在安住」の思想的背景——

西 本 祐 攝

「他力門哲学骸骨試稿」に展開される「現生正定聚論」

一 有限無限観の展開——有限の外に無限あり——

「在床懺悔録」を書き終えた直後、満之は一八九五(明治十八)年二月初めから、「他力門哲学骸骨試稿」を起稿する。同年の三月末まではほぼ二ヶ月にわたり、真宗の聖教を展読しつつ四十五項目におよぶ独自のテーマを設定し思索を展開している。全体の構成は、「一」は「総説」、「二」から「一一」までが「有限無限論」、「一二」から「一六」までが「心霊論」、「一七」から「二〇」までが「神仏論」、「二一」から「二九」までが「仏徳論」、「三〇」から「三四」までが「浄土論」、「三五」から「四五」までが「転迷開悟論」と一応整理できるが、それらは、別々のテーマとしてではなく、有機的な思想連関のもとに論じられている。

話は前後するが、満之は、「他力門哲学骸骨試稿」を執筆する七年前、明治二十一年『教学誌』に連載した「宗教哲

「学講義」の冒頭に、次のように述べている。

哲学ハ思想ヲ以テ原理ヲ考究スルノ学ニシテ其中二種ノ判別アリ 万象全体ノ究竟原理ヲ考究スル者之ヲ純正哲学ト称シ特殊ノ現象ニ就テ其基本タル原理ヲ考究スル者之ヲ特殊哲学ト称ス(中略)今将ニ講述セント欲スル所ノ宗教哲学モ亦一個ノ特殊哲学ナリ(中略)蓋シ哲学ニ純正哲学ト特殊哲学トノ別アルカ如ク宗教哲学ニモ総関宗教哲学ト特殊宗教哲学トノ別アリ 而シテ茲ニ講スル所ハ二者中ニテハ総関宗教哲学ヲ指ス者ト知ル可シ 蓋シ特殊宗教哲学ハ各宗教中ニテ必ス論究スル所ニシテ、、

(『全集』第一卷・二六一頁)

すなわち、哲学を純正哲学と特殊哲学に別け、宗教哲学を特殊哲学の中の一つとして位置づけて、さらに宗教哲学を、「総関宗教哲学」と「特殊宗教哲学」に分類する。ここでは「宗教ト称セラレ得ベキ者ニハ何レモ貫通セル原理ヲ考究スル」<sup>④</sup>のが総関宗教哲学であり、「各宗教中ニテ必ス論究スル所」を特殊宗教哲学であると述べる。つまり、満之のこの構想からすれば、『宗教哲学骸骨』は「総関宗教哲学」にあたり、「他力門哲学骸骨試稿」は「特殊宗教哲学」に当たるといえよう。「他力門哲学骸骨試稿」は、満之のこのような構想の中に位置づけられるものであり、その意味で、この二つの著述は今村仁司氏が指摘するように、

同一の構想の下にある双子著作

(『清沢満之語録』岩波現代文庫岩波書店 四五六頁)

という意味をもつものである。しかし、「他力門哲学骸骨試稿」に展開される満之の有限無限観は、藤田正勝氏が指摘するように、三年前の著作『宗教哲学骸骨』からの新たな展開を見ることができ<sup>⑤</sup>。満之は、すでに大学第三年度の「カント哲学ノート」において、無限と有限との関係を仏教で説かれる真如と方法の関係を示すものとして了解する考察を試みている。また、『宗教哲学骸骨』の構想を断片的に記したものと考えられる「宗教哲学初稿」には、『大乘起信論』に説かれる真如縁起の思想である「凝然真如」「随缘真如」について言及し、さらには、「随缘真如」と阿弥陀仏との関係についての断片的な思索をも行っている。しかし、それらは具体的に密接な関係をもつものとして明

確にされているわけではなかった。この「他力門哲学骸骨試稿」で特徴的なことは、無限を明確に阿弥陀如来として捉えていること、また、「有限ノ外ニ無限アリ」<sup>⑧</sup>という項を立てていることである。

満之は、本稿冒頭の「〔一〕宗教」に、『宗教哲学骸骨』の英訳“THE SKELETON OF A PHILOSOPHY OF RELIGION”にも示した種々の宗教定義を基想として、

要スルニ区々ノ定義其言説甚ダ多様ナリト雖トモ其目的トスル所ニアリテハ彼此一樣ニ皆安心立命ヲ求ムルヲ以テ極致トスルニアルカ如シ

精神ノ本源ニ就テ安心立命ノ大業ヲ与タル宗教ハ是レ則チ必須不可欠ノ要法ナリト云ハサル可カラサルナリ 宗教ハ内心ノ不安ヲ除テ心源ヨリ大安ニ住セシメントスルモノナリ

〔全集〕第二卷・四一―二頁

と述べている。宗教は「安心立命」のために「必須不可欠ノ要法」であり、安心立命を求めることは宗教の「極致」であるとまでいう。これは、満之の実存的な救済への要求に基づく宗教の定義であるといえよう。拙論（上）にも触れた通り、満之は『保養雜記』に、繰り返し「宗教は死生の問題に安心立命を与うるもの」と記していた。『保養雜記』における死生の思索を通して提起されたこの宗教の定義には、肺結核を宣告され、死を身近なものと感じている満之の切実な救済への要求が窺われる。したがって、「他力門哲学骸骨試稿」はこの切実な救済の要求に促されての思索の記録であることが、まずなによりも確認されねばならない。また、満之は安心立命を「内心ノ不安ヲ除テ心源ヨリ大安ニ住」することであると述べており、それは本論の主題である、満之の「現生正定聚論」としての「現在安住」に通底するものである。満之は、安心立命の根柢が変転を免れない有限の事物や我々の相対的価値観にはなく、「有限ノ範圍ヲ去リテ無限ノ境遇ヲ求メ之ニ対シテ精神ノ適合ヲ求メサル可カラサルナリ」<sup>⑨</sup>と言ひ、宗教の「極致」である安心立命は、有限と無限の一致においてのみ実現するという。満之はこのことを、続く「〔二〕無限」に、

安心立命ハ無限ノ境遇ニ対シテ精神ヲ適合スルニアル

〔全集〕第二卷・四四頁

と端的に述べて、さらにその「無限」を具体的に阿弥陀如来と了解していく。満之はこの有限と無限との一致について『宗教哲学骸骨』では、有限と無限は同体か異体かという問いを立て、無限の義、無限の観点に立って了解すれば無限の外に有限はなく、有限と無限とは同体であるという「二項同体」説を立てていた。しかし、「他力門哲学骸骨試稿」では、「依立・独立」「相對・絶對」「單一・唯一」「部分・全体」「不完全・完全」という二項で定義される有限と無限は、同体であると言いださない側面があることを示唆して、満之はそれを「根本ノ撞着」と呼んでいる。

さらに、この「根本ノ撞着」の内実をより明確にするために、「〔五〕有限ノ外ニ無限アリ」という一節を設け、絶對無限と相對有限は、無限を基準とすれば同一体であり、有限を基準とすれば無限はどこまでも有限の外にあるといわざるをえないと指摘する。そして、この二つの立場は矛盾相反するが、相方に根拠があることであり、どちらか一方を誤りと断定することはできないと述べていく。このように『宗教哲学骸骨』において提起した「二項同体」説は、有限無限論における一側面であることが明確に認められているのである。

満之は、『維摩經』仏国品に涅槃界としての仏国土が「彼岸」と説かれることについて、僧肇が注釈する次の文を、この問題を究明する眼目というべき文として、この一節の上欄外に記している。

維摩註二二肇曰彼岸涅槃岸也、彼涅槃豈彼岸之有、以我異於彼、故借我謂之耳、  
(『全集』第二卷・四七頁)

この文は、「維摩註二二肇曰く、彼岸とは涅槃の岸なり。彼の涅槃に豈に彼岸これあらんや。我れは彼に異なるをもつてのゆえに、我を借りてこれをいうのみ。」と読まれる文章である。その意味は、本質的に涅槃に「崖岸」は無いが、敢えて「彼岸」「崖岸」と語るのは「我」が「彼の涅槃界」と質的に異なる存在であるからであり、「我」という有限存在からすれば、明確な断絶を意味する「崖岸」があると言わざるを得ないということである。これは「借我謂之耳」と言われるように、現実的に「我」が有限存在であるという事実立つならば、そこには明確な分限があるのであり、無限（無限界・涅槃界）は有限の外にあると言わざるをえないことを示している。満之はこの『注維摩詰經』

卷第一の文を引用し、「有限ノ外ニ無限アリト云フノ意亦以テ推スベシ」<sup>⑩</sup>と結論している。ここに『宗教哲学骸骨』からの満之の有限無限論における展開が確認される。

しかし、この展開は満之が有限無限の捉え方に新たな見地を得たということのみにとどまるものではない。この展開に見据えられている満之自身の課題は何か。そこにはどのような意義があるか。このことが問われなければならないだろう。これについて、藤田正勝氏は、次のように指摘している。

この捉え方〔二項同体説・引用者注〕はそれ自身のうちに一つの問題をはらんでいる。つまり、有限をそのままの形で肯定する可能性、換言すれば、有限の絶対化の可能性がそこには存在している。

（『清沢満之——その人と思想——』法藏館・二二五頁）

満之は決して有限無限は一体であるという視座を捨てたわけではなかった。なぜならこの視座は「有機組織」「主伴互具」という仏教の縁起観に立つ万有の本来的關係を了解していく上での基想をなすものだからである。しかし、有限をそのまま覚者たる無限と同一であるというならば、迷妄存在としての有限を無条件に覚者たる無限と同一であると肯定する危険性が孕まれているのである。このような『宗教哲学骸骨』の「二項同体」説の捉え方が一面的であり、「有限の絶対化」という危険性をはらむことに留意する視座は、どのようにして満之に開かれたのだろうか。これについて、さらに藤田正勝氏が、

有限の観点——あるいは実践の観点に立つならば——、無限は有限の外にあると考えざるをえない、そのことがここではつきりと述べられています（『現代語訳 宗教哲学骸骨』法藏館・二四一頁）

と指摘していることに注意したい。満之は、Minimum possible という制欲自戒の生活に起因する肺結核発病、そして垂水療養、すなわち「養痾」以降、「略ぼ自力の迷情を翻転し得た」と語り、自力無功の自覚を明確に持続している。これは満之の内面における一つの展開であるとみることができよう。たとえばそれは『宗教哲学骸骨』に試みら

れた自力・他力二門の立場を併存させ、相互の真理性を承認し、統合する立場を構築する試みとは異なり、明確に他力門の教えに依って思索し、探究を続けていくことにあらわれている。

この「有限ノ外ニ無限アリ」という項目を特別に立てて論じる試みは、満之における自身の徹底した有限性の自覚にたつての有限無限論の究明であるということが出来る。したがって、それは無限の立場から真如即万法・万法即真如として関係を了解するのか、あるいは、有限の立場からその関係を了知しえない事実を自身の無明性によるものとして了解するのかという問題をも孕んでいると言えよう。つまり、「有限ノ外ニ無限アリ」という了解は、我々自身が他ならぬ「無明存在」であることを明らかにすることを意味しており、ここに満之が自らの無明性へ眼を向けていることを窺うことができる。このことは同時に、自身の無明性の徹底した信知こそが何よりも我々の課題であることを語っているのではないか。さらにそれは、満之が『宗教哲学骸骨』において有限無限の二項同体という基本的視座に立つて提起した「有機組織」「主伴互具」に、我々有限者は自ら目覚め得るのか否か、という問題に対する推究に他ならない。その推究において見いだされることが無明存在としての自己という徹底した断念であり、それはまた、同時に自身の無明性の徹底した信知という課題を「根本撞着」という一語において明瞭にするという問題設定であったのだといえよう。その意味で「有限ノ外ニ無限アリ」という視座は、『宗教哲学骸骨』における「二項同体」説からの深化という意味を持つ。

ここに示す問題について、満之は「二三八」無明」という項を立てて、無明の問題を「転迷開悟」に先立って確認すべき問題であることを述べ、迷の根本を無明において押さえるべきであることを明示し、さらに『大乘起信論』「心生滅門」に説かれる三細六麁の教説によって「迷・不覚」の構造を確かめていく。そのなかで、満之は次のように述べている。

无明ハ到底有限智ノ説尽シ得ル所ニアラズ（中略）其実体ノ有无ヲ問フニ有ト云フ可カラズ无ト云フ能ハズ 何

ントナレハ無限ノ眼ヨリ見レハ其体アル可カラズト雖トモ有限ノ目ヨリ視レハ其体ナシト云フ能ハサレバナリ  
乃チ有限ノ方ヨリ無限ニ対スル關係ヲ審セントスルニ到底之ヲ尽ス能ハサルナリ  
〔全集〕第二卷・九二頁

無限の智眼においては有限は全て無限内存在として見いだされるのであり、無明の体はない。しかし、箇々独立の観に住する有限者においては無明の体なしということとはできないのだと述べている。これは有限の方から無限を明らかにしようとしても明瞭にしつくすことはできない事実を無明というのであって、無明という実体が存在することを意味するものではない。満之は、この迷の根本である無明は、有限知（目）において説き尽くすことのできないものであり、また、有限の方から無限との關係に目覚めることは断じてありえないことを述べている。さらに、無明を根本とする迷妄者としての有限存在を次のように確認していた。

有限全般ニ関スル要義ヲ略述スレバ有限ノ生存ハ有限ニシテ其前後際共ニ限界アルヤ勿論ナリ 夫レ然リ故ニ  
過去ヲ追想スレハ無量ノ生死アリシヲ否スル能ハス 未来ヲ推考スレハ無量ノ流転アルヲ拒ム能ハサルナリ 之  
ヲ名ケテ無始曠劫未来永劫ノ流転輪廻ト云フ  
〔二五〕有限〔全集〕第二卷・八六頁

有限の生存はその過去を追想すれば無量の生死、未来を推考すれば無量の流転がある。過去・現在・未来を貫いて、無量の生死流転の中にあるのである。それを満之は「無始曠劫未来永劫ノ流転輪廻」と述べている。この了解は、善導が「観經正宗分散善義」深心釈の第一深信において、

一者決定深信ニハ自身現是罪惡生死凡夫曠劫ヨリノ已來常沒常流轉コト无有ニ出離之縁一  
〔定親全〕一・一〇三頁

と示す、いわゆる機の深信を明らかに意識した了解である。満之はすでに「在床懺悔録」においても、

自己ノ罪惡深重ナルヲ反省シ益ス以テ大悲ノ深重ナルヲ自解スルニ足ルヘキナリ（此ニ付機法ニ種ノ深信ト云フ  
コトアリ 機ノ深信トハ我身ノ罪惡深重ナルヲ確信スルコトニシテ法ノ深信トハ大悲救済ノ広大ナルヲ深信スル  
コトナリ  
〔全集〕第二卷・八頁

と述べて、機法二種深信に言及していた。

このように確かめると、満之が「他力門哲学骸骨試稿」において提起する「有限ノ外ニ無限アリ」という視座は、衆生の根本無明による生死流転の実相をこまかすことなく見据えた上での思索によって見いだされたものであるといえる。また、それは、満之が「略ぼ自力の迷情を翻転し得たり」と述べる、満之自身の実践という観点に立つての了解に他ならないのである。

## 二 無限の方便①——その必然性と必要性——

さらに「他力門哲学骸骨試稿」の有限無限論で注意されることは、無限を明確に阿弥陀仏と了解して、無限が迷妄存在としての有限者を導き、無限へと至らせる力用について詳細に論じていることである。満之はそれを「方便」といい、その内容を端的に次のように了解している。

方便ハ無限ノ真相ヨリ出テ、有限ノ当相ヲ完収セサル可カラサルナリ 乃チ無限ヨリ出テ、有限ニ接シ有限ヲ転シテ無限ナラシメサルヘカラサルナリ

〔全集〕第二卷・六九―七〇頁

具体的には「二二」自利他」から「二九」無限之因果」までがこの方便の問題の究明に当たる。この問題を明らかにしていく上で、満之は最初に、あらゆる有限存在が互いに相関関係の中に成立しているものであることを、

万有ハ（中略）自他相對シ彼我相関シテ立ツモノナリ

〔全集〕第二卷・六四頁

と確認し、

心霊ノ實際的行為ニ於テハ茲ニ自利ト利他ト自害ト害他トノ四類ヲ生ス

〔同右〕

と、その相関関係の中における実際の行為においては、自利他自害害他の四類が生じると述べる。その中で、有限者の行為は「各々個別ノ觀ニ住」<sup>⑬</sup>する、「迷乱ヨリ起ル」<sup>⑭</sup>自害害他であるといい、さらに満之は自利他の成就とい



う課題における有限者の現実相を、次のように具体的に述べている。

蓋シ有限ハ各々箇別ノ観ニ住シテ動モスレハ他ヲ以テ讐仇ニアラズモ利害ヲ異ニスルモノト見做スヲ免カレス  
故ニ自害害彼ノ弊ヲ脱スル能ハサルナリ 此状態ニ於テ焉ンゾ 利他ノ徳用アルヲ得ンヤ

〔全集〕第一卷・六五頁

有限は各々箇別的なものの見方に閉じこもり、有限が箇々独立して存在しているという思念を脱け出すことができない。それによつて、他者を仇敵とするほどではなくとも利害を異にする存在とみなし、自害害他していくという弊害を脱することができない。このような有限者には利他の徳用など望むべくもないのである。満之は有限が箇々独立して存在しているという迷妄について、「在床懺悔録」においても「有限箇立」「箇存の有限」「箇存の觀念」という言葉で確かめていた。我他彼此の差別的な思念によつて箇々の主観に閉じこもり有限は箇々で独立しているという自他差別の想念を前提として生きることからは、自らを害し他者を害していく傷ましい生き方しか生み出されないと言うのであろう。それに対し満之は、正当な自利利他は「彼我平等一体ノ一面ヲ覚了」<sup>⑤</sup>する迷乱なき無限者によるのみであると述べていく。満之は、自利の徳性を「智慧」、利他の徳性を「慈悲」と了解し、さらに、この自利と利他、智慧と慈悲という無限の徳性によつて実際の衆生救済の行為が生ずるのであり、そのはたらきを「無限の方便」として確めていく。満之は、

自利利他方便ノ必然ニ至リテハ無限ニアラサレハ之ヲ明認シ難キナリ

〔全集〕第一卷・六五頁

と述べ、「方便」は無限においてのみ実現するのであり有限者が断じて果たすことの出来ないことであるという。このことは、満之が、自利利他自害害他の決定的な分水嶺を「迷・悟」の一点において了解していることを意味する。それはすなわち、有限箇存の觀念に立つ迷妄なる有限存在に根拠をおくかぎり、そのいかなる行為においても自利利他成就はあり得ないという決断を意味していよう。

この確認に立ち、さらに満之は「無限の方便」を、無限者における救済の必然性と、有限者における救済の必要性との二つの側面から確かめていく。

無限（或ハ無限ヲ知覚セルモノ）ニ至リテハ彼箇別ノ觀念ハ是レ只一面ノ表現ニシテ更ニ彼我平等一体ノ一面（寧口実相）アルコトヲ覺了スルガ故、ニ他ノ痛苦ハハ即チ之ヲ自ノ痛苦ト感シ他ノ歡樂ハ即チ之ヲ自ノ歡樂ト感スルカ故、ニ自利ノノ全キカ為ニハ利他ノ全キヲ要シ利他ノ成就ハ即チ自利ノ成就ト感知スルカ故、ニ其大智慧ハ忽チ大慈悲ニ転シテ茲ニ撰化救済ノ大方便ヲ提起スルニ至ル 是レ全ク必然的ノ事項ニシテ決シテ然ラサル能ハサルコトナリトス

（圈点筆者『全集』第二卷・六五頁）

この一段で満之は文章を区切らず、「カ故ニ」という言葉を三度にわたり継いで述べていく。このことは、この一連の文で押さえられる内容が一貫した思想的連関の中で了解されるべき事柄であることを意味しており、また、その内容が必然的関係をもつものであることを意味していよう。

この関係成立の根本は、いうまでもなく満之が最初に述べている「彼我平等一体ノ一面（寧口実相）アルコトヲ覺了スル」という一事にある。無限は諸法平等を覺了すればこそ、他者の苦痛歡樂を、自らの苦痛歡樂として領受するのであり、そこに、無限による衆生救済の具体的内容である撰化救済の大方便を必然的な事項として提起するのである。これは満之が『宗教哲学骸骨』第六章「安心修徳」において、

無限界の住者は無限即ち万有全体を以て己が任とし万有の痛苦を以て己の痛苦とし万有の歡樂を以て己の歡樂とし万有の本体を以て己が本体となし以て無限美妙の靈活を営むものと謂ふべき歟

（『全集』第一卷・三三頁）

と述べた了解を基本的に踏襲するものであろう。無限は智慧の完成に基づいて、万有・諸法の本来性である諸法平等の事実を疑わざるが故に、各々個別の觀に住し自害害他する有限者を撰化救済せんとする大悲方便を必然的事項として提起するのである。<sup>16)</sup>

満之は、無限による摂化救済の方便が必然性をもって提起される事柄であることを確かめ、続いて、無限の「必然」事項である摂化救済が、有限者によって「必要」事項であるのかを問題にしていく。それは無限において「必然性」を持った摂化救済の方便も、有限者に「必要」とされなければ、無限の「自娛楽行」<sup>⑦</sup>にすぎないからであるという。そのことを満之は「二四」救済ノ必要」というテーマ設定のもとに究明していく。そこではまず、満之は有限が無限へ至ることが自然（ここでは、偶然に何等の縁の助けもなく、という意味）に起こりえるものなのかを問題にした上で、それが不可能であるといい、その理由を次のように述べている。

万有ノ開展ハ皆悉ク因縁果ノ法軌（骸骨参照）ニ従ハサル可カラサルナリ 而シテ結果ノ質量ハ常ニ因縁ノ質量ニ順スルモノナリ

（『全集』第二巻・六六頁）

満之は、いかなる有限存在においても無限へ到達することはすべて「因縁果ノ法軌」に従うものであるという。これは満之自身の細注にあるとおり、彼の『宗教哲学骸骨』第四章「転化論」において、ヘーゲルの「正反合」なる弁証法を否定媒介的思考法とし、仏教の「因縁果」の法軌として究明されたことであつた。その確認の上で、満之は有限者にとつての無限による摂化救済の必要性を次のように述べる。

今有限ガ開展シテ無限ノ結果ヲ得ンニハ必スヤ因縁ノ中ニ無限元素ヲ具ヘサル可カラズ 而シテ因素ハ則チ現在ノ有限ナリ 故ニ無限ハ必ス縁素ニ存セサル可カラズ 即チ有限ノ因ヲシテ無限ノ果ニ達セシムルノ縁ハ其用無限ヲサル可カラサルナリ

（『全集』第二巻・六六頁）

現在、因としての有限が、無限なる果へ至る悟道「成仏道」においては、必ず「縁」の無限性、縁としての無限の救済を必要とすると言う。満之におけるこの確認は、「救済ノ必要」が無限の側にあるのではなく、無限に至る根拠を何一つ自らに持ちえない有限者においてあることをあきらかにするものに他ならない。「各々個別ノ観ニ住」しどこまでも自害害他するほかない無明存在としての有限者が、無限に至る悟道においては、必ず無限の摂化救済の方便を

必要とするのである。満之は、因としての有限存在が、果としての無限へ開発・発展する時に、無限の縁を必要不可欠とすることを、一つの「定理」であるとまで言い切っていく。

これらの論述を通して、満之は他力門における「無限の方便」開顯の意義を、無限と有限の相方から、その「必然性」と「必要性」において究明している。満之は、その相方の関係性について無限者による摂化救済の方便も、有限者に必要とされなければ無限の「自娛樂行」にすぎないという。このことは、満之が、現在の自身の有限性の事実においてこそ、無限による摂化救済が必要事項として提起されるのだということ徹底して明らかにするものに他ならない。そこには、どこまでも自利利他成就を希求しつつも、有限なる自身は「各々個別ノ觀ニ住」し、いかなる行為においても自害害他していくほかはない事態が見据えられている。このやむにやまれぬ救済の要求と自身の有限性への悲傷が、無限者による摂化救済の方便を呼び起こす契機となるのである。これは自力無功の自覺に立ち、「有限ノ外ニ無限アリ」と述べた、満之自身の実践に基づく一種の決断における論理の推究であるといえよう。

### 三 無限の方便②——絶対無限と相對無限——

満之は無限者による摂化救済の方便の具体的内容を、さらにどのように了解しているのだろうか。先にも述べたように、満之は、衆生を摂化救済するはたらきである「無限の方便」を端的に次のように述べている。

方便ハ無限ノ真相ヨリ出テ、有限ノ当相ヲ完収セサル可カラサルナリ 乃チ無限ヨリ出テ、有限ニ接シ有限ヲ転シテ無限ナラシメサルヘカラサルナリ

〔全集〕第二卷・六九七〇頁

したがって無限とはいっても、それは、迷妄存在としての衆生の世界に相対化された無限でなければならない。これを満之は「在床懺悔録」において、

仏陀（特ニ阿弥陀仏）ハ其本体固ヨリ絶対ナリト雖トモ其衆生ニ対スル場合或ハ現ニ衆生界（相對界）ニ化現セ

ル場合ニ於テハ亦相對界ノ理法ニ順從セサルヲ得ス 久遠実成ノ阿弥陀仏モ衆生濟度ノ為ニハ相對因果法ニ依ラサル能ハス 故ニ殊ニ法藏比丘トナリ無上不思議ノ因源果海ヲ垂レ玉フ

〔全集〕第一卷・三頁

阿弥陀如来ハ其本久遠実成ノ古仏ニシテ諸仏ノ本師本仏（本師本仏ノ詳義別ニ考求スベシ）仏陀中ノ元祖ナリ 常ニ無縁ノ大悲ニ促サレテ度心遣ル方ナク 茲ニ一大方便ニヨリ現シテ法藏比丘トナリ第五十四仏（世自在王仏）ノ所ニ於テ發心立誓シ非常ノ修行成就シテ遂ニ吾人往生ノ大途ヲ開キ玉ヘリ

〔全集〕第一卷・六頁

と述べて、一実真如界を背景とし、無縁大悲に促されて顕現する従果向因の如来因位法藏菩薩の發願修行とその成就において了解している。このような「相對因果」の理法に順じて開示される無限を、滿之は「他力門哲学骸骨試稿」では次のように述べている。

因果ハ有限ノ理法ニシテ無限ハ因果ヲ超絶セルモノナルコトハ喋々ヲ要セサルベシ（骸骨ニ絶對ト因果ノ節アリ）然ルニ今無限ガ因果ノ形式ニ表現セントセバ必スヤ先ツ其無限ノ本性ヲ棄却セサルベカラサルナリ 既ニ無限ノ品位ヲ棄却シテ有限ニ歸センガ茲ニ再ビ無限ノ願行ヲ成就セズンバ本位ノ無限ニ還復スルコト能ハサルナリ（中略）先ニ無限ガ其本位ヲ棄却スルハ抑何ノ為ナルヤ 他ナシ衆生濟度ノ大悲ニ起因スルモノナリ（中略）是レ其無上位ノ功德ヲ讓テ衆生ニ惠施スルニ外ナラザルナリ 此ニ依テ衆生ノ能ク此功德ヲ受用スルモノハ自己ノ行業ニヨラズシテ全ク他力ノ救済ニ与惠スルヲ得ルナリ

〔全集〕第二卷・七二頁

無限ノ願無限ノ行トハ如何 曰ク一切心靈ノ願望ト修行トヲ集メテ一身ニ荷負スル願行即チ是ナリ 是レ乃チ他力門ノ起リ得ル所以ノ根底ナリ

〔全集〕第一卷・七六頁

ここには、「無上位ノ功德ノ惠施」にあずかる一切衆生が自力の行業によらず、自力無功を知つて「他力ノ救済ニ与惠」するその全体が、一切心靈の願行を荷負する無限の願行によることを指摘している。さらに、滿之は、このような無限を「相對無限」と呼んで、「絶對無限」と區別しその力動的なはたらきを次のように述べている。

絶対無限ハ凝然真如ナリ 相對無限ハ隨緣真如ナリ 凝然真如ハ其名ノ如ク湛然トシテ不作一法ナリ 隨緣真如モ亦其名ノ如ク緣ニ隨テ造作諸法ナリ 今有限ノ衆生ヲ緣トシテ大悲ノ方便ヲ垂ル、ハ則チ此隨緣真如ノ妙用ナリ（中略）吾人各箇ガ必ス大涅槃ニ到達シ得ヘキ証拠ハ何処ニアルヤ 真如隨緣ノ理ニ就テ流轉門ニ於テ万差ト顯現セル諸法ハ還滅門ニ於テ同一本元ニ還歸セサル可カラサル必然アルニ由ル（中略）尚他力門ニハ不變真如隨緣真如ヲ法身上ニ區別シテ法性法身方便法身ト云フ 其方便法身トハ因果的報身仏ナリ

〔全集〕第二卷・七四—五頁

滿之は『大乘起信論』「心真如門」の文言を踏まえ、「絶対無限」に対して「相對無限」という独自の言葉を用いて思索を展開する。「絶対無限」とは「不動不作」なる真如の根源、「凝然真如」であるとす。これに対して「相對無限」とは無明存在としての有限の衆生を緣とした大悲方便、つまり衆生救済を目的とする無限の相對的な世界へのはたらき、「隨緣真如」であるとす。またここでは、真如の「隨緣」のはたらきを、「隨緣真如の妙用」であるという。この一連の文は甚だ難解である。しかし、滿之がここで述べる無限（真如）の力動的なはたらきは、「他力門哲学骸骨試稿」執筆中にも展読した『浄土論註』に展開される「法性法身・方便法身」の二種法身説。さらに、方便法身を因果的報身仏と明記することから、親鸞が『浄土論註』の二種法身説によつて記したと考えられる『唯信鈔文意』の、次の文が背景となつていゝと考へることができよう。

一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法藏比丘となのりたまひて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまふ御かたちおぼ、世親菩薩は盡十方无碍光如來となづけたてまつりたまへり。  
この如來を報身とまふす。

〔定親全〕三・一七一頁

一切苦悩の衆生、「三界ノ衆生ノ虚妄ノ相」<sup>⑬</sup>を照見して、一如よりおこされる大悲の誓願を「隨緣真如ノ妙用」と確かめていゝといえる。このように滿之は無限を衆生救済の力動性において了解してゐるのである。また、滿之は、

今吾人ノ言ニテ云ハシメバ一切衆生ノ往生（即チ万法ノ還元）ハ（阿）弥陀ノ正覚（即チ還滅門ノ必然）ヨリ起ル而シテ既ニ（阿）弥陀ノ正覚（即チ還滅ノ必然）アリ 故ニ衆生ノ往生（即チ万法ノ還元）ハ確固不拔ナリト言ハンノミ  
〔全集〕第一卷・七五頁

と述べている。この了解は、『大経』の次の教言を証左とするものであろう。

われ世にをいて、すみやかに正覚をなりて、もろもろの生死勤苦の本をぬかしめん。〔定親全〕八・二〇頁

阿弥陀仏の正覚が阿弥陀仏の正覚に終わるのではなく、一切苦悩の衆生の抜本的救済を課題とする、一如より来生してやまない如来因位法蔵菩薩の誓願に対する了解である。満之は無限の方便をどこまでも一切苦悩の衆生を捨てず、相対有界界に「従如来生」し、「盡十方無碍光如来」、すなわち本願の名号として顕現することにおいて、念々に衆生の無明を打破し、衆生往生の道を開示する力動的なはたらきとして了解しているといえよう。もとより親鸞は、『唯信鈔文意』において、これを「一切群生海の心」といい、衆生に眞実信の成就する内景として了解するのであるが、満之は、この信心が無限の妙用そのものであること、すなわち、信心が阿弥陀如来の清淨願心の回向成就の信に他ならないことを端的に次のように述べている。

此眞覚（信心；引用者注）ガ如何ニシテ迷情ノ本根ヲ直断シ得ルヤ 他ナシ是レ無限的ノ妙用ナレバナリ 而シテ無限的ノ妙用ガ如何ニシテ有限ノ心靈ニ存シ得ルヤ 他ナシ顕在無限ノ廻向賦与ニ依ルカ故ナリ 其他力回向ノ必然ハ先ニ無限ノ因果中ニ明ナルカ如シ  
〔全集〕第一卷・九三頁

満之は信心が迷情の根本である無明を直断するのは、信心が無限的妙用そのものに他ならないからであり、無限的妙用が衆生にはたらきでる信心の成就は、顕在無限の回向賦與によるという。顕在無限とは、おそらく相対的な世界に顕現する無限、すなわち本願の名号の謂いであろう。ここに満之が、迷情の根本である無明の闇を打破する無限の妙用、すなわち如来因位法蔵の發願修行とその成就を眞実信心成就の内景として了解していることが窺知されよう。さ

らに、満之は次のように述べる。

他力門ノ信行ハ今正ニ其説明ヲ為ス可キ所ナリ 蓋シ此信行ハ是レ正シク前項所説ノ妄見ノ根本ヲ控除スルモノナリ 其様如何ト云フニ此信行是レ正シク有限無限ノ關係ヲ覚知スル（即チ無限ノ大悲ヲ覚知スル）ヨリ起レルモノニシテ全ク悟道ノ源底ニ達セルモノナリ（中略）本根ニシテ既ニ控除セラレンカ自然ニ枝末ノ枯落センコト言ヲ待タサルナリ 故ニ他力門ニハ妄見ノ伏断ヲ多言セサルナリ

〔全集〕第二卷・九三頁

妄見の根本である無明を打破する他力門の信行を「有限無限ノ關係ヲ覚知スル」といい、その内実を「無限ノ大悲ヲ覚知スル」ことであると確め、それによって悟道、すなわち仏道の源底に達するという。「無限大悲ノ覚知」によって悟道の本源・根底に達し、迷妄の根本である無明が破られるならば、迷妄の枝末は自ずから枯れ落ちる。満之はここに迷妄を枝末から漸次次第に根本無明へと断ち切っていく自力門との相違を指摘しているのであり、有限が無限へと至る速やかな「転迷開悟」の実現は、他力門によると述べるのである。有限の衆生を導くこの無限の力用全体を、満之は、「無限の方便」の具体的内容として了解しているのだと言えよう。

#### 四 現生正定聚——無限他力の住持——

満之は「〔三〇〕願行成就」も「〔三四〕有限ノ信心」において、浄土観について言及していく。浄土については、すでに、「西方問答<sup>21</sup>」で指方立相の浄土観をとりあげそれが仮説される浄土であることに言及し、さらに『宗教哲学骸骨』第六章「安心修徳」では、「無限の妙境界」「無上涅槃<sup>22</sup>」という言葉によって思索を展開していた。「他力門哲学骸骨試稿」においては、

天親菩薩浄土論ニ曰ク 二十九種ノ功德三種ノ莊嚴ニ種ノ清浄ハ一法句ニ略入ス 一法句トハ清浄句是ナリト以テ想フ可シ

〔全集〕第二卷・八二頁



と述べて、『浄土論』の教説に示唆を受けながら浄土の具体相に言及している。『浄土論』において浄土は、器世間と衆生世間より成り、器世間は国土莊嚴、衆生世間は仏莊嚴と菩薩莊嚴として説かれる。満之はこの三種莊嚴の浄土の世界について尋ねる際に、『宗教哲学骸骨』において提起した「主伴互具」の了解に基づいて、仏莊嚴Ⅱ主莊嚴、菩薩莊嚴Ⅱ伴莊嚴と了解し、浄土は、自利の願・利他の願・共利の願による主・伴・国土が有機的關係（Ⅱ互具）を実現している自利利他成就の境界であり、また、願心莊嚴の世界であるという。浄土は『浄土論』莊嚴清淨功德に「觀彼世界相 勝過三界道」と説かれるように、どこまでも無漏清淨をその性質とする有限界を超越した世界として説かれる。満之はこのことを「唯仏与仏ノ知見」の「無限靈妙ノ境界」といい、私たち有限者が測り知ることのできない境界であるという。

其實際ハ所謂唯仏与仏ノ知見ナリト云フモノニシテ無限靈妙ノ境界吾人有限ノ得テ測量スル所ニアラサルナリ

（『全集』第一卷・八〇頁）

しかし一方で、満之は、浄土が私たちの有限・差別の世界と隔絶したものではない、ともいう。

三種ノ莊嚴ハ是レ万有ノ成立上ニ必然ナルモノナリトス 其所由如何ト云フニ抑万有ハ是レ有機的組織ニ存立スルモノニシテ其状様之ヲ主伴互具ノ關係ト云フ（骸骨有機組織主伴互具ノ項参照）（『全集』第二卷・八一頁）

満之は、浄土の三種莊嚴を万有（あらゆる有限存在）の成立上において必然のものであるといい、その理由を、万有は本来有機組織、主伴互具の關係を生きているからであるという。満之は、万有の本来的關係である主伴互具の具體的關係を有限者に顯示するものとして浄土の三種莊嚴を了解し、その浄土を万有・諸法の存在の根底にある理法として了解する。しかし、私たち有限者はその理法に目覚めることなく、その根本無明のゆえに過去現在未来を貫いて迷いの世界に流転している。その私たち有限者にとって、浄土は有限者が回復すべき主伴互具という本来的關係性を示す無限界として開示された世界であり、その意味で、浄土は私たち有限者にとって回帰すべき帰依処という意味をも

つものであることが確かめられていると言えるのではないだろうか。

この了解に基づいて、満之は「大経」必至滅度の願に、「国中人天」すなわち浄土の利益として説かれる正定聚に住する生の内容を、「〔四三〕正定不退<sup>④</sup>」に、次のように述べている。

他力門ノ信者正信獲得已後ヲ正定聚不退位ニ住スト云フ 正定聚トハ正ニ大果ヲ成スルニ定マル聚類ノ義ニシテ又宗教上ノ大安心正ニ定リタル聚類ノ義ト云フベシ 有限ノ身心頓ニ無限ノ資格アルヲ自覚スルノ位(悟位、見道位、見性位ト名クル所以)ニシテ宗教實際上最モ重要ナル地位タルコト論ヲ待タサルナリ(中略)且ツ此ニ一到スルモノハ彼ノ大果ニ至ラズシテ前ノ有限地ニ退却スルコトナシ(中略)是レ他ナシ 彼ノ無限他力ノ此信者ヲ住持シテ撰取スルコトアルガ故ナリ 更ニ此他力門ノ正定聚不退転者ハ自己ノ行業ニ依ラズ 純ラ他力ノ救済ニ任スルモノナルカ故ニ此地位ヨリシテ彼ノ大果ニ到ルニ夥多ノ階次ヲ経ルヲ要セス 此土命終ノ立ち所ニ大般涅槃ノ妙果ヲ証得ス(中略) 其正信決定ノ上ハ更ニ一行業ノ以テ証果ノ為ニ修スベキナク未來大覺ノ業事ハ全ク成弁シ

(『全集』第二卷・九五—六頁)

満之は自らの有限無限論に基づいて、真宗教学における「現生正定聚」の生の内実を、「無限他力の住持」「他力の救済」のはたらきによって「有限地ニ退却スルコトナシ」と、すなわち正定聚に住せしめ必ず涅槃に至らしめる、無限他力との関係性の中に生きるものとなることであると了解する。本論において確かめてきたように、この「無限他力」「他力の救済」という言葉は、満之が「絶対無限・相対無限」「無限的妙用」との種々の独創的な言葉を用いて思索し「無限の方便」として明らかにする、無限の力動的な衆生救済のはたらきを内容とするものであろう。

いかなる自力の行業によっても自害害他を必然する生き方を免れない有限者が、無限大悲の覚知という信心獲得によって無限他力の撰取不捨のはたらきの中にある一有限存在としての自己に目覚め、自身の根底に主伴互具の關係性を回復しつつ生きる者となることを、満之は住正定聚の生の内実として確かめているのである。したがって、満之が

不退転の語義に関わつて述べる「有限地ニ退却スルコトナシ」ということも、決して自らが有限者ではなくなることを意味するものではなく、いかなる自力の行業によつても有限箇存の觀念により自害他するほかない生き方を無限他力のはたらしきによつて超えていく人生の歩みの実現を意味するものであると言えよう。満之は、この正定聚不退位を「宗教實際上最モ重要ナル地位」と言い切るのであり、我々の課題が獲信における「住正定聚」の一事にあることを明確にする。この確認に立つて、満之が命終の意義を、単に死としてではなく、現生における住正定聚の歩みの完遂を意味する大般涅槃の妙果の証得として了解し、住正定聚を「宗教上ノ大安心」すなわち「死生の問題」についての安心立命が実現する位に他ならないと確かめていることを、最後に指摘しておきたい。

### おわりに

以上、石水期の「在床懺悔録」「他力門哲学骸骨試稿」という二つの論稿を通して、満之の現生正定聚論を尋ねてきた。その内容については本論において確かめた通りであるが、再往確認するならば、満之が「在床懺悔録」において明らかにする現生正定聚の内容は、有限者が獲信において無限に対する関係を覚知し有機組織・主伴互具の關係に目覚め、現生には有限の境遇を完全に脱却し得ない有限者として生きる現実のただなかに、本願を憶念することにおいて有限箇存の觀念に生きる我が身の事実を照知し、かつ同時に有機組織・主伴互具の關係性を回復しつつ生きる者となることである、と了解するものであった。さらに満之は、「他力門哲学骸骨試稿」で、『大乘起信論』の真如縁起、『浄土論註』の二種法身説を思想的背景として「絶対無限・相對無限・無限他力・他力の救済」との言葉で衆生を撰化救済する無限の力用を推究し、無限の力用によつて有限無限の關係に目覚めたものに開示される有機組織・主伴互具の關係を『浄土論』の三種莊嚴の浄土に重ねて了解する試みをなしている。

この試みは、浄土を未来に期せられる実体的世界として了解するものではなく、我々の現実の生存に深く関わり、

獲信に開示される世界として了解する試みである。それは、現生正定聚を当来の世に浄土を期する生としてではなく、無上涅槃界としての浄土に、回帰すべき処世の帰依処を仰ぐ生の内実として了解するものであったと言えよう。このように確かめられる宗教的信念に生きる生存の内実、満之の現生正定聚論の推究は、満之が「四四」信後行業」で、

一旦瞭然タリシ關係（有限無限の關係・筆者注）ハ常ニ相續シテ永劫不断ナリト雖トモ有限個立的ノ宿習ハ尚其習慣情勢ヲ奮テ常ニ此主伴互具ノ關係ヲ壅蔽セントスルヲ免レサルナリ

（『全集』第一卷・九七頁）

と述べるように、どこまでも有限者の迷妄の深さを見据え、迷妄存在としての自身の現実を一步も離れることなく現する仏道の推究であった。

満之は、この二つの論稿を執筆する直前、明治二七年一月には京都を訪れ、また翌月の沢柳政太郎の解職を受けて、翌年一月七日には沢柳の垂水への来訪を知らせる書簡を稲葉昌丸宛てに認めて、宗門の現状に対し時機をとらえて具体的な行動を早急に起こすべき旨を伝えている。このような事態の中に身を置く満之の、この二つの論稿における現生正定聚論の推究は、本論においても確かめた結核療養中の自己における切実な救済への要求と、宗門時事（人事の興廢）にも明らかかな各々箇別の觀に住し自害害他していく他ない無明存在としての人間のあり方を、自らの教想的思索の上に明らかにしようとするいとなみであり、具体的実人生の中に証される仏道を推究するいとなみであったと言えよう。

石水期に満之が推究した現生正定聚論の具体性は、宗門革新運動への挺身、「病床雜誌」「徒然雜誌」「臘扇記」等の日録に克明に記される様々な人生の問題、死生の問題に自らの現実が問われる求道的思索のあゆみを通して満之に確かめられ、やがて精神主義へと結実していく。そのことを我々は満之の「精神主義」「万物一体」「精神主義と三世」「他力の救済」「我は此の如く如来を信ず（我信念）」等のみならず、精神主義の諸論稿の諸処に十分に確かめることができる。その一々の詳細な考察については別稿を期すことにしたい。

- ① 先の論文「石水期・清沢満之における「現生正定聚論」の究明(上)」にも指摘した明治二八年二月一日付の稲葉昌丸宛書簡には、「如是文庫」第四号に所蔵している『真宗宝典』漢文篇を実父永則に託してほしい旨の内容が記されている。この『真宗宝典』には浄土三部経、七祖の聖教、「教行信証」「六要鈔」「文類聚鈔」「愚禿鈔」「入出一門偈」等が収録されている。また、『療養雜記 第一』には、二月一八日に書籍寄贈を意味すると思われる「願成就文梵漢対弁 南条文雄より」との記事が見られ、同じく二月中の記事として『大経』第十八願の「乃至十念」第二十願の「係念我國」をめぐって『無量寿経』梵本と異本に關心を示す内容の目録が見られる。さらに、「他力門哲学骸骨試稿」の「二五」口力他力」までを二月二十日に書き終えた後、執筆を中断し、二月二日に龍樹「十住毘婆沙論」「易行品」、世親「浄土論」、曇鸞「論註」、翌二日に曇鸞「論註」下巻の再読、道綽「安楽集」、善導「観経疏」「玄義分」と二日にわたって聖教を展読したことが『療養雜記 第二』に記載されている。「二六」方便」以降「四二」獲信因果」まではこの展読直後の二月三日から三月四日までの思索内容である。その後、再び三月二五日まで執筆を中断し、その間の三月五日には善導「観経疏」「序分義」「定善義」の展読を行っている。
- ② 「他力門哲学骸骨試稿」の自筆稿には満之口身による文章移動の指示がなされており、「他力門哲学骸骨試稿」が「三」有限無限」から書き始められていることを知ることができる（清沢満之「哲学骸骨集」 真宗総合研究所編「Ⅱ他力門哲学骸骨試稿」注（7）参照）。このことから、満之は「他力門哲学骸骨試稿」において、他力門仏教、特に「在床懺悔録」で確認した真宗の教説を、自身が宗教を語る上での課題語である「有限無限」をもって体系づけようと試みているとみることができる。
- ③ 「思想は有機体なり」（『宗教哲学骸骨自筆書入』『全集』第一巻・四一頁）。
- ④ 『全集』第一巻・一六一頁。
- ⑤ 藤山正勝『現代語訳 宗教哲学骸骨』（法藏館、二〇〇二年）「解説」参照。
- ⑥ 『全集』第四巻・二二七～二九頁【『Good And Bad』】。
- ⑦ 『全集』第一巻・三二七～三四〇頁。
- ⑧ 『全集』第二巻・四七頁。この「他力門哲学骸骨試稿」「五」有限の外に無限あり」に基づいて金子大栄は、満之の「有限無限・無限有限」との了解を、「満之先生は宗教とは有限と無限との対応であると道破せられた。有限より見れば無限は有限

の外にあり、無限より見れば有限は無限の内にある。これは対応ということである。しかればその対応とは、即ち相応ということであろう。」(絶筆『光輪鈔』「対応の行信」『親鸞教学』第二九号・二頁)と述べ、「対応・相応」と了解し、『浄土論註』讚嘆門釈との関係において了解している。

⑨ 『全集』第二卷・四二頁。

⑩ 『全集』第二卷・四七頁。

⑪ 『全集』第一卷『宗教哲学骸骨』第六章「安心修徳」取意。

⑫ 満之が『大乘起信論』の教説によつて無明を了解することを踏まえるならば、あるいはこれは、『起信論』に「心起とは初相の知るべき有ること無し。而かも初相を知ると言ふは即ち謂く無念なり。是の故に一切衆生をば名けて覚と為さず。本より來(このかた)念心相續して未だ嘗て念を離れざるを以ての故に、無始の無明と説く」(拙訳『大正藏』第三二卷・576―b)と説かれる内容をも踏まえての了解であると考えられよう。

⑬ 『全集』第二卷・六五頁。

⑭ 『全集』第一卷・六四頁。

⑮ 『全集』第二卷・六五頁。

⑯ 『論註』順菩提門證菩提門の「智慧慈悲方便」の教説を背景とする了解と考えられる。

⑰ 『全集』第一卷・六五頁。

⑱ 『真聖全』一・二二九頁。

⑲ 『定親全』一・一九五頁。

⑳ 『定親全』三・一七一頁。

㉑ 『西方問答』(『全集』第七卷・一五五頁)。

㉒ 『宗教哲学骸骨』第六章「安心修徳」(『全集』第一卷・三一頁)。

㉓ 『真聖全』一・二六九頁。

㉔ 「四三」正定不退」については「最後の四三、四四、四五の三節は他の諸節と異なりたる紙に記され、共に綴られてあらず

りし)〔清沢全集〕第一巻・二三八頁、無我山房)と指摘されている。「四三」正定不退」以降は、満之自身によって、それまでの箇所と一緒に綴られておらず、満之の生前に、現在製本されている形態ではなかった。このことは「四三」正定不退」以降を「他力門哲学骸骨試稿」における一連の思想として考えうるか否かという点において問題となる。満之は、「他力門哲学骸骨試稿」の項目に序数を付しておらず、また、「迷悟凡聖」→「獲信因果」が記された「三月四日」から日数において、「四三」正定不退」は「三月六日」に記されている。しかし、前段「四二」獲信因果」の末には、「四三」正定不退」の冒頭に記される図と、同内容のものが記されていることから、本論ではその思想内容のつながりを窺うことが十分に可能であると考える。

25) 満之は「住正定聚故必至滅度」の必然的関係を「無限他力」「他力の救済」という力動的な無限理解を通して了解する。これは近世真宗教学に見られる現益としての正定聚と当益としての滅度という現当二益における住正定聚理解とは異なるものであるといわねばならない。ここに近世真宗教学における「住正定聚」理解を二、三挙げておく。円乗院宣明は『教行信証講義』において、「現生に正定聚の位に等と云ふ処を。今は即時入大乘正定之聚と宣ふ。即時とは易行品に即時入必定とあり。入大乘正定之聚とは論註に仏力住持等とあり。然れば十願に住正定聚とは現益也。」(『教行信証講義集成』三七八四頁)と述べる。また、皆往院は『教行信証講義』において、「今の文は初めに現益に約して正定聚を釈す。次に浄土に約して滅度を釈す。」(同右三七九一頁)と述べる。これらの了解に見られる現当二益の理解においては、住正定聚故必至滅度を実現する力動的な展開について語られることがない。それは裏面から言えば、当来の世に救済を期する来世主義を肯定することといえよう。

26) 『休養雜記 第二篇』(『全集』第八巻・一三三頁)には十一月八日から京都に滞在し沢柳政太郎、稲葉呂丸、井上豊忠、今川覚伸と面会したことを窺わせる記録が記されている。同月十九日に舞子に帰る。「臘扇記 第一号」(『全集』第八巻・三七八頁)には、この頃のことを回想して「廿七年在京都新鳥丸頭町寓略血之日」と記されている。

27) 『全集』第九巻・一〇二頁